

ローソンカップ小学生剣道大会 試合実施要領

1. 試合方法

(1) 予選リーグ

まず基本判定試合を先鋒から大将までおこない、続いて1本勝負を先鋒から大将までおこなう。

(2) 決勝トーナメント

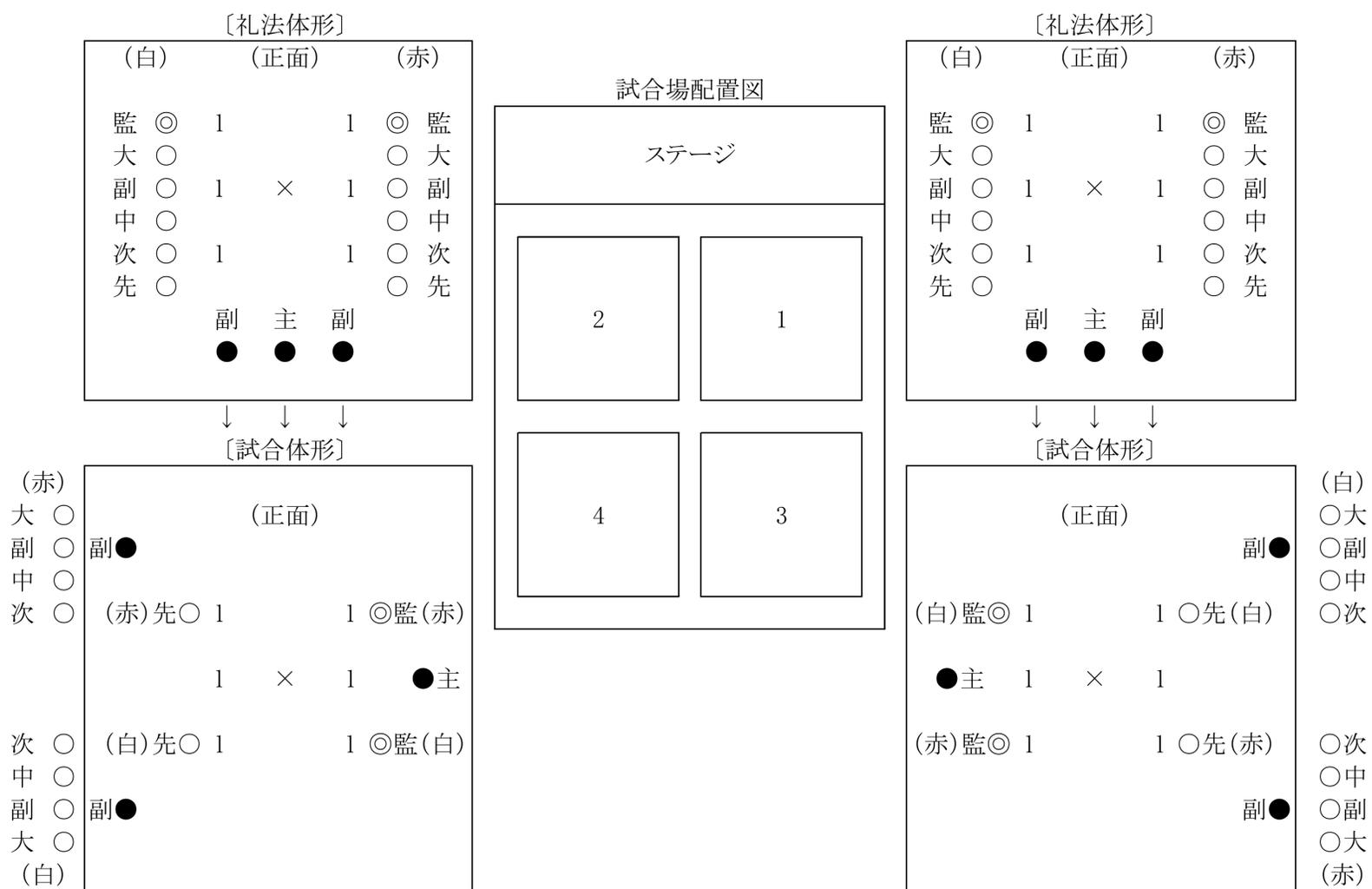
決勝トーナメントの試合方法は、3本勝負を先鋒から大将までおこなう。

2. 予選リーグの試合について(基本判定試合)

(1) 試合開始の相互の礼は、監督・選手全員が面、小手を着け竹刀を持っておこなう。

基本判定試合後は、監督は面を取り、試合終了の相互の礼は、そのままおこなう。

(2) 相互の礼及び試合の体形は、下記のとおりとする。



※2、4試合場の選手配置図

※1、3試合場の選手配置図

(3) 試合の開始については、監督及び選手は9歩の間合いにて立礼した後、蹲踞で待機し主審の「始め」の宣告により、**40秒間**で切り返し、打ち込み稽古(元に戻らない)を続けて行う。

(4) 基本判定試合 (内容の詳細)

○**切り返し**……「正面打ちから前進して左右面4本、後退して左右面5本、正面打ち」を2回繰り返す。(剣道指導要領 参照)

○**打ち込み稽古**……「打ち込み稽古」とは、指導者(元立ち)が与える打突の機会をとらえて打ち込んで打突の基本的な技術を体得させる稽古の方法である。従って、充実した気力で遠間から大技で、正しく・間合い・姿勢等に留意し、基本技・連続技・体当たり・引き技等を繰り返し、打突させる。

『選手は、応じ技(すり上げ、返し、打ち落とし、抜き)を必ず2本以上入れること』

(剣道指導要領 参照)

- (5) 審判の「止め」の宣告により、試合者は速やかに開始線に戻り、判定を待つ。
 - (6) 勝敗は、切り返し・打ち込み稽古の総合判定とする。
(判定基準については、5 基本判定試合 判定基準のとおりとする。)
 - (7) 審判員は、主審の「判定」宣告で勝旗を挙げる。主審は勝旗を確認し、「何対何、勝負あり」と宣告する。(判定に引き分けは認めない)
- [注:主審赤旗(白旗)、副審2名白旗(赤旗)の場合であっても主審は旗を持ち替えずに申告を行い、主審は判定、掲示の確認も合わせて行う。]

3. 予選リーグの試合について(1本勝負)

- (1) 基本判定試合を先鋒から大将までおこなった後、1本勝負へと入る。
- (2) 1本勝負の試合時間は1分とし、勝敗の決しない場合は引き分けとする。
- (3) 勝利チームの決定は、基本判定試合、1本勝負の勝者数により決定する。
同数、同本数の場合は、基本判定試合で勝ったチームとする。(例を参照)
- (4) 試合者のどちらかが倒れた場合すぐに「やめ」をかけ、倒れた者に対する有効打突は認めない。

[例]	基本判定試合					勝本数 — 勝者数	1本勝負					勝本数 — 勝者数	総本数 — 勝者数	勝敗
	先	次	中	副	大		先	次	中	副	大			
A道場	本田	井田	吉本	上田	依藤	8	本田	井田	吉本	上田	依藤	1	9	勝
	1	②	1	②	②	3	X		メ		X	1	4	
B道場	②	1	②	1	1	7	X	メ		コ	X	2	9	負
	瀬尾	重高	山岡	松本	和田	2	瀬尾	重高	山岡	松本	和田	2	4	

4. 決勝トーナメントの試合について(3本勝負)

- (1) 一般財団法人全日本剣道連盟 剣道試合・審判規則とその細則及び、本大会の申し合わせ事項に準ずる。
- (2) 試合開始の相互の礼は、選手全員が面、小手を着け、竹刀をもっておこなう。
- (3) 決勝トーナメントは3本勝負とし、試合時間は2分、勝敗の決しない場合は引き分けとする。
- (4) チームの勝敗は勝者数、総本数により決定する。同数の場合は、代表戦をおこなう。
選手は任意とする。代表戦は1本勝負、時間を区切らず勝敗の決するまでおこなう。
- (5) 試合者のどちらかが倒れた場合すぐに「やめ」をかけ、倒れた者に対する有効打突は認めない。

5. 基本判定試合 判定基準

(1) 総合評価の着眼点

(引用参考文献、全日本少年武道(剣道)錬成大会)

(ア) ただ早く動作ができていではなく、正しく、リズムや拍子をもって動作(技)をしているかを見る。

- ① 剣道具、剣道着、袴の着装ができているか。
- ② 正しい蹲踞ができているか。
- ③ 竹刀の持ち方は正しいか。(左・右 打ち手になっているか)
- ④ しっかりと手首(刃筋)を返し、伸び伸びと大きな切り返しができるか。
- ⑤ 打ち返しや技を出すとき、左こぶしが左右に動いていないか。
- ⑥ 応じ技を2本以上入れているか。
- ⑦ その技は正しく動作しているか。

(イ) 正しくひとつひとつ見るためには、下記のような留意点を観察する必要があるが、少なくとも「総合評価の着眼点」を見て判断する。

(2) 切り返しの留意点

- (ア) 竹刀の振り方は正しいか。
- (イ) 足運びは正しいか。(退き足が歩み足にならないか)
- (ウ) 左右面を打つ角度が約45度になっているか。
- (エ) 「正面打ち」の際、一足一刀の間合いから打っているか。
- (オ) 竹刀の打突部で、打突部位を正しく打っているか。
- (カ) 「左右面打ち」のとき左こぶしが正中線を通り相手が見えるところまで上がっているか。
- (キ) 「正面打ち」のとき両腕が自然に伸び、左こぶしが中心(みぞおち)に納まっているか。
- (ク) 最後まで気合いと体勢が崩れないか。

(3) 打ち込み稽古の留意点

- (ア) 足さばきは正しいか。
- (イ) 技に適した足さばきができているか。
- (ウ) 間合いの取り方が適切か。
- (エ) 技が正確(気剣体一致)であるか。
- (オ) 最後まで気合いと体勢が崩れないか。
- (カ) 残心がなされているか。

6. その他

- (1) 元立ちの竹刀の長さも、選手と同じ111cm(約3.6尺)以下を使用することが望ましい。
- (2) 竹刀の計量は実施しませんが、各監督、代表者は選手の竹刀の点検を各試合ごとに充分おこなってください。
- (3) 各チームの監督は当該試合終了後、試合結果を確認してください。